

2校目で、小学校から中学校に移った。3学年所属となった。小学生から中学3年生へとジャンプアップである。大きな学校だった。9組までであった。その学年の教員集団は、結構な人数となった。学年で動くというのが通常であった。

学年主任の先生は、50代後半のベテランの先生だった。自分の学年団をまとめていくのは、なかなか骨の折れる仕事だろうと思われた。人柄がにじみ出るような先生だった。刑事ドラマでいうところの〇〇さんのようなベテランデカという感じだった。

いろいろなことを教えてもらった。決して押し付けるようなことはしない方だった。さりげなくアドバイスをもらえた。20代後半の小学校からやってきた若造を育てようとしてくれたのかもしれない。

あるとき、夜の会があり、学年主任に誘われて二次会に行った。どこに行くのかと思ったら、お寿司屋さんだった。初めて入る店だった。中に入ると、ねじり鉢巻きに真っ赤なカーディガンの大将がいた。お品書きやメニューというものが見当たらない。値段がわからない。大丈夫なのか。学年主任にお任せするしかない。緊張しながら、大将が握るお寿司を味わった。わさびもガリも違った。お茶も違った。

必死だったせいか、何を頼んだのかをよく覚えていた。学年主任に教えてもらい、相場も理解した。とにかく美味しかった。また行きたくなった。これは、あまり間を置かずに行った方がいいと判断し、同僚数人と行ってみた。

何を頼めばいいかは、覚えている。このくらい頼めば、このくらいというのもわかる。それでも緊張していた。同僚が「はまち、お願いします」と言ってしまった。すると、今日もねじり鉢巻きに真っ赤なカーディガンの大将が、いきなり「そんなの魚じゃねえ」ときた。怒られた。はまちは注文してはいけないことを学んだ。

何回か通ううちに、大将が喜ぶ頼み方があることを知った。まずは「煮いか」である。次に「穴子」にする。これで、大将は満足そうである。この二品から始めるのが間違いのない頼み方である。どうやら、大将の仕事がよくわかるものを頼むと上機嫌なようである。途中で「穴きゅう」を挟んだりすると、またうれしそうである。「煮いか、お願いします」というと、待ってましたとばかりに、「はいよ！」とくる。こちらは、ホッとする。「穴子、お願いします」というと、お客さん、わかっているねとばかりに、「はいよ！」とくる。

このお店は、今はない。大将がいつも真っ赤なカーディガンを着ていたのは、達磨寿司だからだろう。今でも、お店があった場所を通ると、あの学年主任と達磨の大将を思い出す。お寿司屋さんに行き、穴きゅうがあると、つつい頼んでしまう。そして、一品一品味わうように口にしたら、あのお寿司を思い出すのである。「穴きゅう、お願いします」「はいよ！」